

男女分裂以後の ファッション史

新古典主義の立場から

相馬俊樹

アソ・ホランダール 著

中野香織 訳

▶性とスーツ

11・5 刊 四六判291頁 本体2800円

白水社

トマス・ラーカーの『性の創造』(一九九〇年)によれば、男女のそれぞれの性のアイデンティティが確立され、性の分化が達成されたのは十七世紀のことであり、それ以前には人類にはただ一つの性しか存在せず、女性器は完全に進化しきっていない未発達な男性器にすぎないと考えられていた。著者アソ・ホランダールは、十七世紀以降の男女の服飾表現の変化がこのラーカーの説の正しさを証明

しているかに見えるという。一つの理想的フォルムによりすなわち、中世後期に本格的なファッションが開始してからずっと男性の仕立て屋が男女双方の衣服を製作していたため、男女の外見はほとんど類似していたのであるが、一六七五年にドレスメーカー(女性仕立て業者ギルド)の結成がルイ十四世によって許可され、女性服を女性自身が製作するようになると、男女の外見の分化が始まり(性差は対照的に多様化していった)、男性服はシブルの誕生、女性服はシブルの進化していき、一方、女性服は舞台衣装のように装飾過剰でロマンティック(パロディック)なものになっていく。前者は男性的な性質を、そして後者は女性的な性質を帯びるようになるというよりもよいかもしれない。

分裂後の男女双方の衣服についてもう少し詳しく見てみると、男性服の方は、スーツの原型である(シャツとタイを伴う)着+ベスト+パンツの組み合わせがすでに十七世紀には存在していたが、現代のわれわれが着用するようなモダンなティラードスーツに近いものが登場したのは新古典主義の時代であるという。ギリシア民主主義の明晰さとローマの工芸技術の力強さを表現するために、装飾をできるだけ排したシンプルなフォルムが理想とされ、表面的なものではなく構造そのものが重視された。色彩についても黒・茶・白・淡黄色のような地味なものが使用され、光沢は失われて、フォルムが際立つようになされた。新古典主義時代の男性服が目指していたものは「建築に匹敵する」イギリス仕込みの仕立て技術テイリングによってラオコーン群像やアポロン像のような古典的ヌードを再現することであった。このように、完璧な趣味を追って扱っている。

著者は新古典主義のモダンな美学の立場からファッション史を語っているわけだから、表面的な装飾や髪といったパロディックな要素に否定的なのはあたりまえである。また、そうであるからこそ、いままでのファッション史ではあまり取り上げられなかった男性のスーツを西洋のファッションを常にリードしてきた存在として評価することができたのであろう。だが、今度は逆に、今世紀になって近代化されてしまったあの『装飾』の運命が気にかかる。そこで思い出されるのが、本書と同じ九四年に出版されたステフェン・チャラウェイの『パロディック、パロディックの文化』である。この書物は、今世紀の室内装飾、舞台衣装、帽子、靴などに表現された過剰な趣味を追って扱っている。

(美術評論)